

巻頭言

「ヒマラヤ学誌」の第7号をお届けする。ブータンでの3年間にわたる「教育学」を柱としたフィールドワークと、ニューギニアでおこなった「フィールド医学」の実践研究を特集した。本誌第6号の発行が1996年5月であるから、ちょうど4年ぶりということになる。本来、定期刊行物である学術雑誌がかくも長い空白をもったことを、編集者としてまず深くお詫びしたい。

「ヒマラヤ学誌」は1990年に創刊された。1988年10月に、京都大学の医学・農学・霊長類学・社会学・文化人類学のフィールドワーカーが集まり、登山と学術研究の融合を標榜して「京都大学ヒマラヤ研究会（ASH）」を発足させた。本誌は、ASHが発行する学術誌である。主要メンバーが重なる山岳団体・京都大学学士山岳会（AACK）の支援を受けて、京都大学ヒマラヤ医学学術登山隊（KUMRE）を組織し、ヒマラヤに遠征するとともにその学術研究成果を速報する場として本誌が機能してきた。一連の研究は、ヒマラヤを巨大な低圧実験室に見立て、そうした苛酷な環境への人間の適応を、「フィールド医学」という視点から捉えようとした。1989年のムスターグ・アタ峰、1990年のシシャパンマ峰、さらにそれに続くネパール・チベットでの学術調査を特集した「ヒマラヤ学誌」1-3号は、1991年度の秩父宮記念学術賞授賞の対象となった。

1988年度から1995年度までの8年間、戸部隆吉、掘了平の両先生を研究代表者とする文部省科学研究費（海外学術調査）の助成を受けて、第1次から第19次にわたる学術遠征隊が送り出された。この8年間で、参加した研究者は90名（複数の隊への参加もあるので、のべ155名）であり、フィールドでの全調査日程は合計約5000日に及ぶ。第1号から第6号までの「ヒマラヤ学誌」は、こうした8年間の継続研究の成果だった。その間、シシャパンマ8000m峰に60歳を含む23人が登頂し、西はパミールから東は雲南までのグレート・ヒマラヤの全域を覆うだけでなく、モンゴルや南米アンデスにもその足跡を残した。その一方で、ASH創立以来の主要なメンバーが、こうした毎年続く野外調査に、徐々に疲弊していったのもまた事実である。

1996年度に科学研究費がいったん途切れた。野外調査が途絶え、出版も途絶えた。逆に、この休止の期間に新しい芽も育った。それまでの調査を足がかりとして、1997-1999年度の3年間、辻本雅史を研究代表者とする「教育学」のフィールド研究が科学研究費の助成を得て、ネパール・ブータンでの調査をおこなった。また、松林公蔵をリーダーとする「フィールド医学」の研究も、地道な活動を続けつつ今回は調査地をニューギニアへと展開している。登山と学術研究の融合を志して始まった本誌は、フィールド・ワークをもとに「環境と人間の関わり」を考える学際誌へと変貌しようとしている。こうした新しい胎動を、「ヒマラヤ学誌」の第7号としてお届けしたい。

編集委員を代表して、松沢哲郎